ベトナム社会とキリスト教

— ジェム政権とカトリックを中心に —

中　野　秀一郎

Abstract

Catholicism (or Christianity) in Vietnam was destined to de expelled from this land, being isolated from the indigenous culture.

At the outset, the vietnamese ruling class admitted the expansion of catholicism, partly because of its merit of accompanying the highly developed Western technology, partly because of its usefulness as political power in their internal struggles, but finally they oppressed it.

Under the French colonial rule, naturally, catholicism was under the protection of colonial power, but anti-French independence movements were also anti-Catholic.

Diem regime, though being supported by America, was regarded as a machine of foreign rule. As his regime was also pro-Catholicism, it was to be expelled from this country.

Catholics, always being the minority in Vietnamese context, as an isolated island in the great ocean, take a certain kind of "pattern" in their existence, regardless of different historical settings.

はじめに

ベトナムの場合のように，土着の宗教的慣行としてのアニミズムや祖先崇拝が強固に根を張っている伝統型社会の中に，キリスト教のような高度に洗練された世界宗教が入ってゆく場合，どのようなインパクトや葛藤が生起し，その結果いかなる社会変化が生まれるのかという問題は，文化接触(文化変容)の研究家にとってはきわめて中心的な関心事であると思われる。けれども，本稿のささやかな結論が示唆するところは，ベトナム社会の宗教的慣行がキリスト教との出会いによって「第三の」豊饒な果実を生み出したというよりはむしろ，キリスト教の浸透は，ある意味で，社会の表層を捉えただけであって，[1] それが一部のベトナム住民に深く受け入れられた場合でさえ，伝統文化との新しい結合は不確かで，むしろそれは土着社会と断絶した一種の「孤島」としての性格が強いものだったと思われる。確かに，旧サイゴン周辺にみられた聖母教会（マリア信仰）はきわめて呪術的，現世的な性格が強く，キリスト教土着化の一片を示しているということもあろう。けれども，チュウ大統領（カトリック，1968－1975年在職）でさえ特別の（専属の）呪術師を抱えていたということは，アニミズムや占星術がキリスト教とは独立に，かれらベトナム人のメンタリティを支

(1) 同様な指摘は，Relph Smith, *Vietnam and the West* (1968), pp.70－85；Helen B. Lamb, *Vietnam's Will to Live* (1972), pp.128－152 にあり，かれらはカトリシズムが伝統的な儒教にとって替わるものではなかったと結論している。

(2) もっとも，R. Smith がカオダイズムをカトリックの土着化と考えたり（op. cit., pp. 71, 73），また S. L. Popkin によるカオダイズムの組織とカトリシズムのそれとの類似性の指摘があるが（Popkin 1979：p.194），ベトナムにおけるカトリシズムの受容が，アニミズムや占星術，さらには儒教との関係で「孤立的」であった大勢は否定すべくもない。別の形の「土着化」としては，Woodside（1971）p.286 参照。

配していたと考えることが妥当であるという印象を避けることができない。(2) キリスト教信仰は，従って，受け入れられた場合でも，ベトナム的伝統型思考と無関係であったか，あるいは一部農村コミュニティの場合のように，普遍主義的志向を脱落させた形で閉鎖的日常性の中で短絡的な世界観・道徳観として機能したかのいずれかであったと思われる。

加えて，キリスト教は，必ず非土着的なもの（例えば，フランスのもの）との関連で受けとめられた。もちろん，仏植民当時からフランス本国へ留学し，西欧的価値観を（優秀な成績で）身につけて帰国したものも多い。こうしたベトナム知識人のメンタリティに関して，これを実証的に明らかにする歴史的資料を筆者は手元に持ち合わせないけれども，あえて忖度するに，かれらの内面にはキリスト教的・西欧的普遍主義を異物とするアンビバランスが残存し続けたであろうことは想像に難くない。(3)

もっとも，数字的にみれば，ベトナムのカトリック信者は1840年の42万人から1900年81万2千人，1927年123万7千人，1956年180万人と増え続け，1960年中頃の数字では南ベトナムに150万人，北ベトナムに70万人，合わせて220万人余(全人口比で約10％)で，人口比でみれば東南アジア大陸部ではもっとも布教の成功した地域と考えられているのである。(4)

カトリックの浸透 ― 仏植民地支配以前 ―

ベトナムへのカトリックの浸透は，ヨーロッパの拡大期，すなわち16世紀にその起源をもつが，ここでは近代から現代への接続を重視して，ほぼ現代の地理的範囲をベトナム（越南）として統一的支配を確立したグエン王朝を中心に，仏植民支配の形成期にかけて，ベトナムがどのようにキリスト教と関わってきたかを簡単に眺めておきたい。

ヨーロッパが持続的な拡大期に入り，東洋に対しても浸透を始めた時に，2つの主要な目的があったといわれる。すなわち通商活動とキリスト教の布教である。最初にポルトガルが，そうして次にはオランダがこうした活動の頂点に立っていたが，後者は1637年にはトンキンのフンエンに商館を開いている。

ベトナムへのカトリック伝道に関していえば，フランスはかの有名なアレクサンドル・ド・ロード（Alexandre de Rhodes，1591－1660）の個人的活躍によって他を圧倒することになる。1624年に初めて安南に入った彼は，ベトナム語を修得して布教活動を行い，後にアルファベット文字によってベトナム語を表記する方式（Quoc ngu と呼ばれる）を整備し，『ベトナム語辞典』を刊わしたのである。しかし，17世紀中葉には，カトリックの布教が伸びるにつれて，祖先崇拝や儒教的諸伝統に基礎を置く家族構成を中核とした社会構造の弱体化に危機を感じたベトナムの支配階級はキリスト教弾圧に転じ（もっとも迫害はトンキンで激しく，安南では宣教師たちはグエン氏から礼をもって遇せられた〔マソン　1969：47－48頁〕），ベトナムへの本格的な浸透は次の18世紀へと持ち越されるのである。

1733年，タイソン村出身のグエン3兄弟（Nhac, Lu, Hue）は反乱を起こし，トンキン民衆の反乱にも助力を与えつつ，北のチン氏（Trinh）と南のグエン氏（Nguyen）を破り，結局，1780年後半には，3兄弟でトンキン（末弟），コーチンシナ（次兄），安南（長兄）の3地域に於ける支配を確立する。しかし，グエン氏の若年の王グエン・アン（Nguyen Anh，1762年2月8日生）はコーチンシナで忠義の士を集めて失地回復の戦いに全力を尽していた。そして，かれが17世紀のグエン朝の勝利に習って外国

（3）伝統的な知的・道徳的権威に安んじる文人階級に対し，西洋の事情を伝えて〈近代化〉への必要――諸制度の改革を含めて――を説いたゲーアン生れ（1828年）のカトリック教徒Nguyen Truong To は有名であるが，決して好意的には迎えられなかった。〔Khoi 1955：pp.363－364〕

（4）社会活動についても，病院，孤児院，養老院などの経営の外に例えば教育面では，1966年現在，1300の学校とひとつの大学（カトリック系）があって，30万人の学生が学んでいるが，その58％は非カトリックであると述べられている。〔Kham 1966：p.20〕

に援助の申し入れを決心したとき，この決定に大きな影響を与えたのは，のちに彼の信任厚い顧問となったアドランの司教ピニョー・ド・ベーヌ師（Pigneau de Béhaine, évêque d'Adran）であった。かれは，1741年生れで，外国伝道神学校に学び，24才でフランスを離れ，コーチンシナで布教活動を始めていたが，1774年にはそこで助任司祭に任命されている。

1784年，グエン・アンは彼の4才の幼い息子カン王子をアドランの司教に託し，フランスへ援助の交渉に向わせた。その結果，1787年11月28日ヴェルサイユにおいて，モンモラン伯爵（外相）とアドランの司教との間で同盟条約（いわゆるヴェルサイユ条約）が調印されることになるが，その内容は次の如くであった。

「フランスは，グエン・アンの領土回復の努力を援助することを誓約する。フランスは完全装備（とくに野砲一門）の部隊1,450人の分乗するフリゲート艦4隻を派遣する。その対価として，フランスはダナン港およびプーロユンドル島の割譲を受ける。フランスは，他のすべてのヨーロッパ諸国を排除して，完全な自由通商権を享受する。」（強調点筆者）〔マソン　1969：57頁〕

もっとも，この計画は決して順調に進行したわけではない。司教の計画を《興奮した頭に浮んだ夢》だとこきおろしたインド派遣軍司令官コンウェー伯爵の外相に対する悲観的な報告もあって，インドでの足止めの期間が長かった。しかし，この困難を乗り切って（多数のこの地区の仏軍人を説得して）最後には，グエン・アン救助に向うことに成功したのである。

こうした強力な援軍をえて，グエン・アンは1792年攻勢に転じ，1801年の戦いでは，父祖伝来の首都ユエを奪回，翌年には北にのぼってハノイに迫った。

かくして，大勢は結着し，ベトナムの諸地方は実権をもつ単一君主のもとに，グエン朝の承継者グエン・アンのもとに，現在の地図にほぼ対応する統一帝国を実現することになる。これがベトナム最後の王朝といわれるグエン王朝の成立である。グエン・アンはその第一代目の皇帝としてジアロン帝(Gia-long)と称した。もっとも，かれが正式に皇帝の位につくのは，ジアロンが中国によって認められ，その帝国にベトナム（Viet Nam）という称号を与えられ，その首都をフー・スァン（Phu-Xuan）に定めてから，再に2年後のことであった。

国内政治におけるジアロンは，その法典の大部分を清朝から直輸入した。かくして，「ベトナム皇帝は中国皇帝と同じく，最高の主であり，国家の宗教的祭主でもある。政治面からいえば，ありとあらゆる民事的・軍事的権限は皇帝の一身に集まる。皇帝の裁判には上告はなく，彼は，税を徴し，土地と人民にたいする絶対の権利を保有する。宗教面からみれば，皇帝は天子であり，最高の霊の力の受託者であり，その威令は目に見えない精霊にも及ぶ」という。（強調点筆者）〔マソン　1969：62頁〕

たまたまこのように，ジアロン帝とフランス，あるいはカトリック教との結びつきがきわめて密接であったため，彼の統治においては，中央集権的な儒教的帝国を形成しつつも，なおかつフランス（この関係を皇帝は積極的に利用した）及びカトリック教との関係は決して悪くはなかった。

ジアロン帝は，1820年2月3日に没した。皇帝位を承継したのはミンマン（Minh-mang）であったが，かれは文人としての教育を受けた国粋主義者でベトナムの伝統を重んじたから，当然，カトリックの影響はベトナムの祭祀を破壊し，祖先崇拝や天と国家に対する義務の観念を喪失させるものだと感じた。これは，中国ーベトナム的伝統に固執するひとびとにとっては，カトリックに対するきわめて普遍的な反撥の形式であったといえる。〔Woodside 1971：p.284〕加えて，ミンマンには，ジアロン帝がコーチンシナ副王に任じていた親カトリック派のレ・バン・ユエット（Le Van Duyet）—タイソンとの戦いの英雄のひとり—が政敵（競争者）として存在していたことも，混乱を大きくする原因であった。ユエットとは公けには争わなかったとはいえ，

キリスト教迫害の方針はユエットの抵抗にぶつかったし，そのことはそのままベトナムに於ける北部と南部の対立，統一帝国の亀裂を意味していたからである。

1832年にレ・バン・ユエットが死ぬとミンマン帝のカトリックに対する全面的迫害が始まる。ユエットがサイゴンで秘かにフランス人の宣教師と通じて彼の政治的野心を実現すべくヨーロッパ製の武器の調達をさえ考えていたので，サイゴンでは多数のキリスト教徒の参加した反乱が起こっているが，ミンマン帝はこれを徹底的に粉砕している。

次の皇帝ティウチ（Thieu-tri，1841－47）もさらにその次の皇帝トゥドク（Tu-duc，1847－1883）も共に執拗なキリスト教迫害政策をとり続けた。

当時，ベトナムに居住していた外国人ということになれば，それはカトリックの宣教師たちであったが，かれらは「《シーザーのものはシーザーに》返すべきことを忘れて」〔Khoi　1955：p.340〕，改宗者たちに反政府運動をけしかけ，キリスト教に有利な国家をつくることさえ考えていた。実際，ベトナムは地理的にもその海岸線が長く，例えば中国などと比べると，ヨーロッパの文物，思想，人間が入り込んでくるのが容易で，これを防ぐのは至難の業であったと思われる。ある報告によると〔Woodside　1971：p.285〕，つとに1756年に約30万人のベトナム人キリスト教徒がいたというが，これは当時のベトナムの人口でみれば，20人に1人の割合になるのである。1800年代には，いわゆる"Christian Village"といわれるものさえ成立していて（例えば，ミンマン帝に1832年に報告されたユエの近郊のThira Thien villageの場合），そこには教会と西欧人の神父がおり，農民の信仰もきわめて強いものであったという。〔Woodside 1791: p.286〕

1858年に，最終的にはフランスの介入を招く一因となったグエン朝歴代の皇帝たちによるキリスト教迫害の背景には，しかし同時にまた，当時のベトナム社会の中にキリスト教を受け入れる社会階層がいたということも否定することはできない。社会 ― 経済状態の悪化もその一因であるが，中国と比べてみると，ベトナムの農村では儒教的基盤やこれを支えた紳士階級の存在が脆弱であった点が指摘されているし，加えてある種のキリスト教土着化の進行も見逃せない ― 1839年にミンマン帝に直訴したナムディン省の兵士の一群は，自分たちの父も祖父もカトリックであったから，この信仰を守ることは「孝の道」（filial piety to ancestors）に沿うものであると，「踏み絵」の強要に抗議している。〔Woodside 1971：p.286〕　しかし，いずれにしても，キリスト教の流布が反政府運動と結びつく傾向（例えば，1830年代のレ・バン・コイ Le van Khoi の反乱では神父マルシャンMarchand がシャムの援助さえあおぐありさまであった）があったので，これを弾圧することが歴代皇帝の重要な任務になってしまった。

伝統的な学者階層も，またその儒教的合理主義からキリスト教を分析して，これを痛烈に批判した ― もっともそれには誤解も含まれていたと思われるが，中国と比べて，ベトナムではキリスト教の理解はきわめて高かったといわれる。〔Woodside 1971: p.287〕(5)

仏植民地支配下のキリスト教

ベトナムとフランスの関係をきわめて悪化させ，最後にはフランスのベトナムへの介入の引き金（植

（5）本稿では，ベトナムにおけるカトリックの布教の歴史を主として，MassonとLe Thanh Khoiによって素描したが，ベトナム・カトリック布教史の専門家の間では，この問題について既に「標準的なテキスト」であるとされているch.Maybon，*Histoire moderne du pays d'Annam*（1920）とGeorge Tafoulet，*Le geste française en Indochine*（1955）がある。今回は残念ながら，これらの文献を参照していない。もっとも本稿での布教史の部分の目的は詳細な史実の記述にあるのではなく，カトリシズムとベトナム社会の関係のパターンを示唆するにある。

民地支配の出発点）となったのが，キリスト教迫害であったことは今日周知の事実である。しかし，同時にこの背景には，36年におよんだ治世の末に1883年7月この世を去ったトゥドク帝の後，一年余の間に皇帝が4人も入れ替わるというグエン王朝内部の混乱（それはそのままこの帝国の動乱でもあった）があり，この期に乗じたフランスは順次ベトナム攻略を続け，1883年8月には首都フエに進撃した。その結果，第一フエ条約（アルマン条約・癸未条約）が成立して，ベトナムはフランスの保護国になることを承認する。

植民地支配下では，当然のことながら，これを促進する役割をもつカトリックの布教が大いに保護されることになる。例えば，フランスが最初に植民地化したメコンデルタ地帯では，フランス市民や法人，退役軍人や役人と共に，カトリック教会には広大な土地が交付されて開墾が奨励された。北部・中部でもカトリック寺院は広大な寺領をもって多くの小作人を擁していた。〔真保　1968：266頁〕しかし，全体としていえば，カトリックの成功は，決して植民地政府の保護政策によるものではない。もしそうなら，フランスの直接的な支配がもっとも強かったコーチンシナでカトリックが最大の成功を納めていたはずである。しかし，事実は，仏植民地支配下で，ベトナム三地域の都市部エリート階層ではカトリックの信者の数は伸びておらず，むしろトンキンやアンナン北部で主たる信者数の伸びがみられる。実際，1945年現在，これらの貧しい地域の農民の20％がカトリックであった ― そして，この地方では決して植民地行政官はキリスト教に好意的ではなかったといわれる。伸びの原因は，ひとえに，教会がうまく経済的・政治的テコを使って民衆を操作したからであった。〔Popkin 1979：p.190〕もちろん，植民地官僚制の土着エリートには，特にコーチンシナではそうであるのだが，カトリック教徒が他に抜きんでて多数を占めていたのである。

こうした事情を考慮すれば，仏植民地下で拡大した村落カトリックは，主としてより良い生活を教区に期待した貧しい農民達の連合体であって，そこでは宣教師たちが一定の力をもって，行政官僚制や封建的地主に対して改宗者の利益を守る立場を貫いていたことが重要である。農民たちにとって，こうした共同体への参加は決してカトリックの信仰に帰依したためではなく，むしろ教会が日常的にかれらのめんどうをみてくれる重要なスポンサーであったからである。南部コーチンシナで改宗者が少なかった理由は，この地方では貧しい農民は村を離れて新しい土地へ移動することができたし，あるいはまたこの地方に特有なさまざまな秘密結社（secret societies）が教会に負けず劣らずのコミュニティ形成力（民衆のめんどうみ）をもっていたからだと考えられている。〔Popkin 1979：p.193〕

しかし，それにしても，注目すべきはこの少数ながら強固に構造化されたベトナムの村落カトリックであって，かれらはいわゆる都市のカトリックとはまったく異った社会的性格をもっていた。後者は，いってみればヨーロッパのカトリック信者と変わるところはなく，非カトリックと共存しながら，各自己れの良心に従って宗教的慣行を行なっていたが，村落カトリック，特に北部のそれは，大海の中の孤島の如くにカトリック村落コミュニティを形成し，神父の指導のもとに毎日ミサに出席し，鐘の音を合図に祈り，質素な生活に甘んじつつ，外の世界についてはほとんどなんの情報も与えられなかったという。〔Kien 1963：p.83〕別の報告によれば，(6) こうしたカトリック村落は，伝統的なベトナム村落がカトリックに改宗したのではなく，むしろ宣教師たちが，改宗者を人里離れた場所に移住させて人工的に形成したものが多く，そこでは特殊なカトリック的言語や慣習が行われたという。このような特異な性質のため，カトリック村落はしばしば外の世界（村落）と折り合いが悪く，水（灌漑用水）や村落

(6) *Informations catholiques internationales*, Dec. 15, 1961.

間の境界の問題で紛争を起こすことも稀ではなかったといわれる。何よりも，かれら自身が，ベトナムという世界の中で，絶えず「異端者集団」(corps étranger)であるという意識をもち続けていた。そして，かれらの幼稚な信仰(というよりはむしろ迷信)，野卑な言語は，決してその周辺にキリスト教的救済の信仰を広めるに効あるものではなかった。

やがてベトナム・ナショナリズムの運動が展開するにおよんで，独立を要求する反仏運動は，同時にまた反カトリシズムの色彩をも強く帯びるようになる。カトリックと非カトリックとの間で，例えば土地の争いなどで紛争が起ると，仏植民地当局はカトリック教会の言を入れて，これをカトリックに有利に取り計らったり，あるいはまた教会自身が土地を買って，これを貧しいカトリック改宗農民に与えるなどの行為は，反植民地支配，反カトリックの感情を，一般のベトナム民衆の間に植えつけるのに大きな役割を果したと思われるのである。こうした植民地勢力との「野合」を，キエンはベトナム・カトリシズムの犯した一種の原罪(une sorte de péché original)と規定している。〔Kien 1963：P.86〕独立運動へ参加した多くの良心的・愛国的なカトリック教徒は，ある意味で，この〈原罪〉の贖罪を求めたひとたちではなかったか，という議論もあながちうがちすぎとも思えない。実際，1945年以降，ベトナム民主共和国政府が「信教の自由」を認めたので，多くのカトリック信徒達が反仏運動に参加した。もっとも，バチカンはバオダイ(Bao-dai)を支持したし，ハノイにいたアメリカ国籍のローマ法王特派公使ドーリイ(Dooley)は「共産主義者」に協力するカトリック教徒は破門に処するとおどしをかけた。〔Kien 1963 : p.86〕フランス軍の支配下にいたカトリックも決して少なくなかったし，かれらのうちのあるものは軍団を組織してレジスタンス運動と対決したものもあったが，そのうちのいくにんがよく自分達の置かれた歴史的状況を理解していたかどうかは疑問である。

他方，ナショナリズムの運動に馳せ参じたカトリック教徒たちは，例えば，国際世論に訴えるための手段を完全に奪われていたホー・チ・ミン政府のためにスポークスマンの役割を買って出た4人のベトナム人司教たちのように，「独立」のために組織的な活動に参加していた。司教たちは，ローマ法王に「独立」の支持を懇請する手紙を書き(1945年9月23日)，フランス派遣隊が上陸するにおよんでは，アメリカに対してフランスの植民地主義復活に反対して欲しいという革命政府の要請を書き送った。「国家救済のためのカトリックの連合」(La Ligue des Catholiques pour le Salut National)が結成され，非カトリック教徒や知識人たちをも包摂した「民主党」(le Parti démocrate)が誕生したのもこうしたカトリック教徒の愛国的な努力によるものであった。〔Clementin 1954：pp.2263～2264〕

ゴ・ジン・ジェム政権とカトリシズム

1945年9月以来の仏越戦争(第一次インドシナ戦争)の中で，バチカンとその伝道団がこの国の政治に深く介入し，反共的で親カトリック的な政権の樹立に腐心したことは多くの歴史的事実が示している通りである。後にジェムの有力な後援者となったアメリカ人スペルマン枢機卿(le cardinal Spellman)が1948年春バチカンの使者としてサイゴンを訪問しているが，彼は自分の訪問がカトリック教会とベトナム(極東)との「新しい関係」の幕開きを告げるものだと演説した。〔Clementin 1954：p.2269〕しかし，1949年サイゴンに「ベトナム国」(l'Etat Viêtnamien)が成立し，カトリックの前皇帝バオダイが返えり咲くに当って，バチカンはこの計画を承認し，法王自身がバオダイに祝福の手紙を送っていることでも分かる通り，ここにはカトリック教会の利害をベトナムにおいて守り通そうとするローマの強い意図がみてとれるのである。実際，クレマンタンは書いている。

「ローマは，カトリックの政治家による政府，あるいはカトリック教徒が強く入り込んでいる政府の

樹立が実現可能であるようなすべての国に関心をもっているのだが，ベトナムに関しても，戦前から，熱心なカトリックであるバオダイの息子バオロン（Bao－long）の統治を強く望んでいたのである」と。〔Clementin 1954：p.2269〕

バオダイ帝の帰国で，カトリック教会は直ちにふたつの政治的目標の実現を計画した。ひとつは，カトリックの政党を結成し，アメリカの支援を得てフランスに圧力をかけ，ベトナムのカトリック共同体を革命派（la Résistance）のブロックから引き離すこと，ふたつには，アメリカの介入によってフランス植民地支配にとって替わらせることであった。第二の点についていえば，アメリカの政治・経済的支配の方が仏帝国主義の支配より目立たないから（1950年6月以前のフィリピンや南朝鮮の場合のように），主権が守られているようにみえると考えられたのである。

こうして，アメリカの支援をえたカトリックの勢力がベトナムの政治権力を掌握するための土台が構築されていった。

ジェム（Ngo Dinh Diem）は，1901年1月3日クアンビー省で，17世紀にカトリックに改宗した教育ある官吏の家庭に，ゴ・ジン・カーを父として生まれた。父親のカーはタンタイ帝（Thanh－thai 1889－1907年在位）の儀典省長官の要職にあったが，仏植民地支配の屈辱に耐えかね，官位を棄てて独立運動にコミットしたといわれる。ジェムは，父ゆずりの愛国心と燃えるような信仰をもっていたが，この事実はかれの「使命感」（特に，その政治的ファナティシズム）を理解する上で重要である。同時にかれはまた儒教の影響をも強く受けており，治者と被治者の間に絶対君主制的「家父長制」的な関係を想定していた。彼は書いている，「主権を司るものには聖なる要素が必要である。そして，祭ごとを行なうことは，すなわち民と天との間の仲介者となることである」と。〔Fall 1963：p.237〕その強いナショナリズムの故に，かれは年若くして仏植民地政府の圧力に抗しフランスの保護国であったアンナン王朝バオダイ帝の大臣職を辞任し，また1944年7月にはフランスの官憲の手からかれを守った日本軍に対する協力をも拒否している。同様に，家族的忠誠を重んじた彼は，長兄コイ（Khoi）がベトミン（Viet Minh）の手で殺されたことを理由に，ホー・チ・ミンが提供した革命政府の内務大臣の地位をも拒けたのである。

1949年5月には帰国したバオダイ帝のもとで首相を要請されたが，ひとつにはベトミンがこれを機にかれらの支配地区のカトリックを弾圧することを恐れたため，ひとつにはフランスとの妥協がかれの愛国心を満足させえなかったため，この要請を受けなかったのである。かくして，かれは，フランス植民地主義とベトミン共産主義というふたつの敵を相手にして，ベトナムカトリック教徒を動員，再組織化して闘うという（1949年当時には既に絶望的な）〔Fall 1963：p.242〕試みに挑戦することになる。1948年にあるフランスの政治リポートは，6年後の出来事を予言しつつ，ジェムの意図について次のように書いている，

「彼の目的は，カトリックの勢力を再組織，強化してベトナムに真の統一と独立を獲得することであった。充分な力を得たところで，外国，なかんずくアメリカと関係を結び，経済的・外交的分野でその支援を要請する。

フランスに対しては，その勢力がなお彼にとって利用価値があるので，当分は穏健な態度で望む。米国が介入する時期は，フランスがインドシナでの紛争を解決する能力がないということが明らかになった時点である」。〔Fall 1963：p.242〕

1950年，ジェムは日本に旅立ち，そこでミシガン州立大学の政治学者フィシェル（Wesley Fishel）に出会うが，この若い政治学教授はジェムに対してアメリカへの支援要請を助言する。1951年，米国に渡ったジェムは精力的にキャンペーンを展開する ― かれは各地の大学で講演し，ベトナム・ナショナリズムの重要性（それが反共産主義の支柱になるし，そのためにはフランスからの完全な独立が必要なの

だ）を説いて歩く。スペルマン枢機卿の後援もあって，かれは遂にワシントンに「ベトナム・ロビー」を作ることに成功するが，そこにはアジア専門の下院議員ジャド(Walter H. Judd)，上院議員マンスフィールド(Mike Mansfield)，それに若き上院議員ケネディ(John F. Kennedy)などが顔を連ねていた。

1953年，アメリカでの地盤作りを一応完了すると，ジェムはベルギーのサンアンドレ・レ・ブルージョ・ベネディクト僧院にもどるが，ここは極東への伝道活動の中心地であった。そこでは，ベルギー人の神父ヂェシェ(Father Raymond de Jaesher)がジェムのすべての計画の重要なアドバイザーであったといわれている。〔Fall 1963：p.243〕

ディエンビェンフーの陥落によって機は熟し，1954年6月4日のジュネーブ協定調印はジェムに最終的な決意をさせることになる。6月16日，バオダイ帝はパリに滞在中のジェムにベトナムに帰って新しい政府を組織するように要請する。6月26日にサイゴンへ帰ったジェムは，7月7日に最初の内閣を組織する。

ディエンビェンフーの後，北ベトナムではカトリック教徒の間に教会による宣伝工作が行なわれた。すなわち，神と聖母マリアが北を離れて南へ移られたからその福音に浴すためには南へ移住しなければならない。秘蹟を行なう神父も数カ月のうちにひとりとしていなくなるであろう。その上，フランス軍が撤退ししだいアメリカが北ベトナムへ原子爆弾を落とすだとか，南へ移ったカトリック教徒には土地，水牛，金銭が支給されるとかいう噂がみだれとんだ。〔Kien 1963：pp.87－88〕カトリック教徒に配られた政治的パンフレットには，神が南へ行ってしまったことを嘆いて血の涙を流している聖母マリアの像が描かれていた。こうした極端な煽宣活動に対してカトリック教会内部からでさえ，批難の声が上らなかったわけではないが，結果的には何千，何万という北の村落カトリックの教徒たちが，パニック状態のまま，神父に誘導されて南への脱出を始めたのである。神父の中には，モーゼがヘブライ人をつれて脱エジプトを遂行した故事を思い浮べていたものもあったであろう。とにかく，正確な数字は分からないが，雑誌『国際カトリック情報』(1961年12月5日)(Informations Catholiques Internationales)によると，こうして北を脱出したひとびとの総数は860,206人，そのうちカトリック教徒は676,384人，また，難民委員会の委員長ブイ・バン・ロンによれば，総数は928,152人，そのうちカトリックは794,876人であったという。

こうして北から南へ逃れてきたカトリック教徒は，ジェム政権の重要な支柱となるが，かれらはいわば上流階級の出身者であって，貧困な農民カトリックはサイゴン周辺に貧民として溢れ，パニック状態が過ぎると北へ帰りたいというものさえ出てくる始末であった。

しかし，カトリシズムがジェム政権の公式の嚮導イデオロギーであったことはまちがいない。ジェムはその演説を「神の御加護がありますように ―」と結んだ。ユエとダラットの大学には，それぞれ司教のカオ・バン・ルオンとグエン・バン・ラップが学長として任命された。文学や哲学の教授の多くは司教や神父たちで占められていた。人文研究所，パストゥール研究所などの学問研究の要職もカトリックによって占められた。1956年現在の政府要人(大臣，長官など)の場合，41人のカトリックが数えられるが，かれらはほぼ全体の⅔を占めていた。〔Kien 1963：pp.90－91〕

バチカンの反応は予想通りであった。ローマは1955年12月11日にジェム政府を承認し，必要なあらゆる援助を約束した。すなわち，ジェム政権の誕生によって，かれらの昔ながらの伝道の夢，ベトナムの地にカトリックの〈プリンス〉を即位させるという夢が実現したわけである。サイゴンの教会は名誉称号「大寺院」(basilique)を与えられ，1959年2月にはここで「聖母マリア会議」(le Congrès marial)を開催する栄誉に浴した。この会議では，かつての南京の大司教で当時台湾に逃れていたユー・

ピン司教が，南ベトナム在住の中国人コミュニティに共産主義との闘いにおいてベトナムの政府と人民に協力すべきことを説き，ジェム政権の在ベトナム中国人政策に側面から強い支援を与えたのである。〔Kien 1963：P.91〕

フランスのカトリック系労働組合は，専門家をサイゴンに送って，ジェムの労働者組織化政策に援助を惜しまなかった。

こうした状況の中で，民衆レベルへのカトリックの影響はどのようなものであっただろうか。まず，北部から移住してきた教会単位の村落カトリックに対しては，かれらの大部分をサイゴン周辺やメコン河右岸の沼沢地帯に定住させ，運河沿いに3～4キロごとに教会堂（その階下は，農作業場や倉庫として共同で使用された）を建立して，一戸当たり3ヘクタールの水田を与えた。〔真保　1968：267頁〕南ベトナムへの介入に踏み切ったアメリカは，また，カトリックを反共の重要な精神的砦と考えたので，さまざまなカトリック系組織を民衆の間に結成し，そこへアメリカ系の神父を送り込んだ。「軍隊のカトリック化」に関しても，1957年初めから「カトリック将校団」をつくり，また軍隊内部に「カトリック宣教委員会」を設けて，「カトリック忠誠心」を基準に昇進を考慮するということさえ行なわれた。

しかし，こうしたジェム政権のプロカトリシズムが，国民の大多数を占める非カトリック教徒の反撥を招かぬわけはなかった。ジェム政権は，結局のところ，仏教徒や儒教徒の〈大海〉に孤立することになるし，しかも，ベトナム史上いつもそうであったように，この場合もカトリックは「外国勢力」（アメリカ）と重ねて理解されたので，ジェムに対する民衆の反感は反アメリカ感情（ベトナム・ナショナリズム）と重なって強まりはすれ，弱まることは決してなかった。1955年に著名なイギリスのカトリック作家グレアム・グリーン（Graham Greene）はこのような状況を次のように書き記している。

「ジェム政権の崩壊に手を貸しているのはまさにカトリシズムそのものである。なぜならジェムの真正な信仰がアメリカの顧問たちによって利用されてきたので，今やカトリック教会は民衆の間にあるアメリカに対する不評を分ちもつ危険にさらされている。不幸なことだが，スペルマン枢機卿をはじめとして，ジーロイ枢機卿（cardinal. Gillroy）やキャンベラの大司教らが続々サイゴンを訪問した。そして，これらの訪問者たちを華々しく出迎える儀式のために巨額の金が使われたので，今やカトリック教会はこの冷戦の時代に西側陣営にあってアメリカの同盟なのだという印象をひとびとに与えることになった。たまたまジェムがかつてのベトミン支配地域を視察するときにも，神父がひとりと，それにアメリカ人がひとり傍に付き添っていた。

ベトナム全体のカトリックの人口比はだいたい英国の場合と同じで10％であり，これではカトリックの政府を正当化するには不充分というべきである。ジェム政権の閣僚たちがすべてカトリックであるというわけではないが，しかし，ジェムがその支持者の多くを疑いの目でみるのも無理もないし，その結果，実際の要職はかれ自身とその一族のメンバーが独占することになる。出入国のビザの審査をジェム自身が行なっている ― 。

南の政府は，自由の証しでもって北の全体主義と対決するかわりに，自ら非能率な独裁政治に落ち込んでしまった。新聞は抑圧され，検閲は厳しく，法延の判決によってではなく行政的な命令で人が追放されている。このような政府がひとつの信仰 ― カトリシズム ― と同一視されるのは不幸なことである。ジェムは，この寛容な国民に反カトリシズムの遺産を残すことになろう」と。(7)

1954年に書かれたクレマンタンの論文は，ジェム政権を観察した後に次のような結論を下したのではない。しかし，そこには，ベトナム・カトリシズムの運命が鋭く見抜かれているのである。クレマンタ

(7) *The Sunday Times*, London, April 24, 1955 & *New Republic*, Washington D.C., May 9, 1955.

ンは書いている，

「ベトナム・カトリシズムの指導者たちはバオダイストの仮面をつけて植民地体制と深く妥協してきた。そこで，今や多くのカトリック教徒が所詮は外国の支配の一形態でしかなかったと判明したこの宗教に背を向けた。— 中略 — ベトナムにおけるカトリシズムの未来はバラ色ではない」（強調点筆者）と。〔Clementine 1954：p.2247〕そしてかれは，「外国勢力」としてのカトリシズムについて次のような説明を加えている，すなわち，ベトナムにおいて「カトリック政党」が示す反民族的な政治的傾向は，今日ローマで強い影響力をもっているふたつの勢力，ジェズイット派とベネディクト派の介入の故であって，かれらの野心はベトナムの「ヨーロッパ的統合」（intégration européenne）である。前者はアメリカ産の政治的・経済的支援をもって，後者はカトリシズムを頂点とする封建的神聖帝国の建設によって，この目的を達成しようとしている，というのである。南につくられたジェム政権がこうした〈野心〉に対応していたことは既にみてきた通りであるが，それ故にまた，この「外国の支配」は当然のことながらベトナムの地から追い出される運命にあったといえるのである。

ジェムの政治をつぶさに観察した後で書かれたキエンの結論は，ベトナム・カトリシズムの性格をいっそう具体的事実に則して浮き彫りにしている。キエンは書いている，

「ベトナムのカトリック教会，少なくともその指導者たちは，ジェム政権にその命運を賭けていたので，カトリックと非カトリックを分け隔てている溝をますます大きくしてしまった。しかしながら，ジェム体制がその内部矛盾に溺れはじめるにつれて，多くのカトリック教徒が反体制派の戦列に加わり，民衆運動に参加していった。バチカンでさえ，ジェム政府が生き残るチャンスは小さいとみてとると，しだいにこれと距離を置くようになる。いずれにしろ，カトリック分子が権力を奪取したこと — これについては，教会上層部とバチカンが相当な援助を惜しまなかったわけだが —，南ベトナムの世俗的・精神的機構のすべてをカトリックが掌握したことは，カトリシズムは，結局のところ，外国から持ち込まれた一宗教に過ぎず，西欧の利益のために奉仕するものだというベトナム人たちの考え方をいっそう強める結果になった。ベトナムの愛国的で進歩的なカトリックが現在の状況を乗り越えて，ベトナムのカトリック教会を民族的で民主的な方向へ位置づけることができるかどうかが，ベトナム・キリスト教の未来にとって決定的に重要な問題なのである。多数派であるベトナムの非カトリック教徒がカトリック教会に対して判定を下すのは，教義の問題によってではなく，カトリック教徒がジェム政府とアメリカ支配に対してどのような態度をとるかによるのである」と。（強調点筆者）〔Kien 1963：p.92〕

おわりに

よく知られているように，ジェム政権の終末は悲劇的なものであった。ジェムとその弟ニュー（ジェム体制のイデオロギーとしての"Personalism"の創案者で名門École des Chartesの卒業生）はいったんはショロンの教会へ逃げたが軍隊に摑まりそのまま殺害されてしまった。この1963年11月1日の軍事クーデターについては，ジェム政権の重要な後盾であったアメリカがかれの統治能力に最終的に見切りをつけた結果であると考えられている。

いうまでもなく，ジェム政権の崩壊は多元的な要因の複雑な組み合せをもつ歴史的過程として起っている。しかし，その直接的な原因となったものは，まさにジェム政権の体質そのものであったカトリシズムと無関係ではない。南ベトナム（ベトナム共和国）の1956年憲法第17条は信仰の自由を国民の権利として認めているが，ジェム政権とカトリシズムがどのような関係にあったかについては既にみた通りである。G.グリーンがつとに観察したように，〈Diemocracy〉と呼ばれた家父長的独裁制がカトリシズムと重ねられた「不幸」のほかに，それが反ナショナリズム（＝アメリカの支配の手段）とし

てベトナム人たちの目に映っていたことが重要である。

ジェムの兄のトックは一族の故郷であるユエのカトリック大司教として，宗教界に絶大な権限をもっていたが，その古都ユエで1963年の春，仏教徒たちが釈迦の祭りに宗教旗の掲揚を禁じられたことから，ローマ・カトリック教徒であるゴー一族に対するかれらの不満が爆発し，予想を越える激しさで全面的な政治危機に発展した。

同年5月13日の朝日新聞はその特派員の報告として事態を次のように伝えている。

「インドシナの席けんをねらう北ベトナムと密接な連携をたもちながら，その前衛の役割を果すベトコンは西側に無気味なあい口をつきつけつつ，ゴ政権に弾圧されたカオダイ，ホアハオ，ビンスエンなどの各宗派武装兵をはじめ不満分子を糾合して，広範な反ゴ人民戦線結集に全力をかたむけている。さる9日にはゴ大統領の生地で政府軍の支配下にあるユエ（サイゴン北方640キロ）でベトコンゲリラのせん動によるといわれる仏教徒約3千が暴徒と化し鎮圧に向った政府軍との衝突で多数の死傷者を出す事件が発生した。これは仏陀の祭の行事の最中におきたものではあるが，単なる偶然事件とはいい切れず〈民衆の内在的不満〉の現われとみてよいようだ」（原文のまま）。

激化する仏教徒の反乱に手を焼いたジェム政権は，8月21日には仏教寺院の総襲撃を命じるが，この事件は広く国際的な反響を呼んで，ジェム政権の威信失墜にとどめの一撃を加えるものとなった。

繰り返すまでもないことだが，ジェム政権崩壊をそのカトリシズムの性格に排他的に還元しようとするのが本稿の意図ではない。それどころか，体制崩壊の原因ということになれば，ベトナム・ナショナリズムを一貫して受け継いできた共産側の大義，ジェム政権の示した偏狭な「同族支配」と独裁の政治経済の実質的な崩壊と執拗なテロリズム，そして南ベトナム内部に存在した権力・金銭亡者のエゴイズムなど，あげるべき要因は決して少なくない。けれども，象徴的な形で，ジェム政権がベトナムにおけるカトリシズムの歴史的運命を荷っていたというのが，この小論の結論である。象徴的といえば，1960年代に入って，既に多くの観察者がジェム政権の問題性を適確に暴露していた段階で，これにテコ入れの政策を買って出たのがローマ・カトリック教徒のケネディ大統領（1960年11月18日大統領に当選）であり，その大統領が，また，軍事クーデターでゴー兄弟が殺害された同年同月，かれらの後を追うかの如くにテキサス州ダラスで暗殺されたことである。1963年11月22日のことであった。[8]

付　記

この研究の一部は，関西学院大学共同研究研究補助費に負うている。また，この共同研究グループのコンビーナー大島襄二博士の御鞭撻がなければ，この小論の完成はみられなかったであろう。ここに感謝の意を表するしだいである。

（8）参考までにベトナムにおけるプロテスタントの伝道について付記しておく。
1887年にシンプソン（Dr. A.B. Simpson）によってアメリカで結成された「キリスト伝道連盟」（The Christian and Missionary Alliance）は，1893年，1897年，1898年，1902年，そして1905年にベトナムへ伝道団を派遣しているが，1911年になって初めて，現地に住みついた宣教師が出現する。
1920年に宣教師たちはダナンに聖書学校を開いて，ベトナム人牧師の教育を始めるが，1924年には，福音教会（Gospel Church）が正式に設立され，完全なベトナム語訳の聖書も出版される。
1930年代に入ると，宣教師たちはさまざまな山岳民族（Koho, Cham, Rade, Jarai, Bru, Katuなど）を相手に布教活動を開始する。
1966年現在で，約300余の教会と牧師が存在すると報告されているが，信者の数については特に記録がない。
〔Kham 1966：pp.22－23〕

BIBLIOGRAPHY

Buttinger, Joseph. 1968. *Vietnam: A Political History*. New York:Frederick Praeger, Pub.

Cadière, Leopold. 1958. *Croyances et pratique religieuses des viêtnamiens*. 2e édition. Saigon: Imprimerie Nouvelle d'Extrême-Orient.

Clementin, Lire. 1954. Le comportement politique des institutions catholiques au Viêtnam. *Les temps modernes* 1954(juin):2248—2275.

Duncanson, Dennis J. 1968. *Government and Revolution in Vietnam*. London: Oxford University Press.

Fall, Bernard. 1963. *The Two Viet-Nams*. New York: Frederick Praeger, Pub.

フォール，バーナード．1969．『ヴェトナム戦史』松本洋(訳)，東京：至誠堂．

Hammer, Ellen J. 1966. *The Struggle for Indochina: 1940—1955*. Enlarged Edition. California: Stanford University Press.

Heymard, Jean. 1962. *Vérité sur l'Indochine*. Paris: Nouvelles Edition Debresse.

Kahin, George M. ed. 1967. *Governments and Politics of Southeast Asia*. 2nd edition. New York: Cornell University Press.

Kebschull, Harvey G. ed. 1968. *Politics in Transitional Societies: The Challenge of Change in Asia, and Latin America*. New York: Appleton-Century-Crofts.

Lancaster, D. 1961. *The Emancipation of French Indo-China*. London: Oxford University Press.

Le Thanh Khoi. 1955. *Le Viêt-Nam: Histoire et Civilisation*. Paris: Edition de Minuit.

マソン，アンドレ．1969．『ベトナム史』杉辺・根本(訳)．東京：白水社(文庫クセジュ)（原著 Masson, André. *Histoire du Viêtnam*. Paris: Presses Universitaires de France.）

松本信広．1969．『ベトナム民族小史』東京：光波青店（岩波新書）

Murti, B.S.N. 1964. *Vietnam Divided: The Unfinished Struggle*. Bombay: Asia Publishing House.

中野秀一郎．1968．「南ベトナム社会の構造と過程」『東南アジア研究』6(1):55—72.

Nguyen Khac-Kham. 1966. *The Acceptance of Western Cultures in Viet-Nam*. Saigon: Ministry of Cultural and Social Affairs.

Nguyen Kien. 1963. *Le sud-Viêtnam depuis Dien-Bien-Phu*. Paris:Francois Maspero.

Nguyen Thai. 1962. *Is South Vietnam Viable?* Manila.

Phan Thi Dac. 1966. *Situation de la personne au Viêt-Nam*. Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.

Pluvier, Jan. 1974. *South-East Asia from Colonialism to Independence*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Popkin, Samuel L. 1979. *The Rational Peasant*. California: University of California Press.

桜井由躬雄；石澤良昭．1977．『東南アジア現代史』（世界現代史7）東京：山川出版社．

世界経済調査会．1957．『ナショナリズムの研究』世界経済調査会．

『国家政経』（世界政経特集号）1975（6月）．

Shaplan, R. 1966. *The Lost Revolution: Vietnam 1945-66*. Illinois: Harper.

真保潤一郎．1968．『ベトナム現代史』東京：春秋社．

Woodside, Alexander B. 1971. *Vietnam and the Chinese Model*. Massachusetts: Harvard University Press.